



ひこばえ



発行 京都教区教化委員会

教化本部企画室

075-351-5260

kyoto@higashihonganji.or.jp

丹波第2組 懇談会

「大丹波」から 「口丹波」へ

烏丸五条を起点として、山陰地方を経由し、山口県下関市に至る国道9号（山陰道）。京都市と峠一つを隔てて西北に広がる亀岡盆地は、晩秋から初春にかけて「丹波霧」と呼ばれる深い霧が発生する。亀岡市内を流れる保津川は、鴨川や淀川に繋がり、古来より丹波地方の豊富な食材や木材を運ぶ水運が発達し、現在の保津川下りの発着地となっている。

今回は丹波の玄関口である亀岡市東部文化センターを会場に懇談会を行った。

■9月6日（土）午前10時00分

■丹波第2組参加者（住職8名 門徒1名）

本部専任委員（1名） 駐在教導（1名）

▼丹波第2組は、国道9号沿線に広がる亀岡市・南丹市園部町・船井郡京丹波町の11ヶ寺からなる。この地域は丹波地方の入り口を意味する「口丹波」とも言われ、その先にある福知山以北は「中丹波」、兵庫県但馬地域、丹波篠山は「西丹波」として区別されていた。▼この日は午後から同会場において、同朋総会（住職・坊守会・門徒会・門徒女性の会）が開催され、今年度の事業計画等が協議された。組の事業は同朋総会に加え、門徒総会研修会、忘年会、同朋大会、研修旅行が実施され、坊守会と合同で同朋女性の会も組織されている。▼以前、教区会館常磐報恩講において、丹波第2組門徒会の方々が中心となり、お斎のぜんざいが振舞われていた。これは組門徒会研修の一環として、組内の交流を目的に取り組まれていた。▼40〜50年前から口丹波・中丹波・西丹波の広域教化として、「大丹波組」なる視点での教化が取り組まれてきた。

しかし交通の便の悪さや、経費の増大などにより数年前より各組の交流を重点とした教化に方針転換された経緯がある。

丹波第2組同朋大会



2月16日に南丹市国際交流会館を会場に開催された同朋大会は150名の参加者で行われた

参加者の声

◆7年間続いた常磐会館報恩講のぜんざい作りは、「報恩講に行ったのに法話が聞けない」との参加者の声に、やむなく中止になったとのこと。

◆口丹波は北部を中心に高齢化が進む地域であり、子育て世代の多くは京阪神へと移り住んでいる。数年後には門徒が数軒になることが明らかになっている参加者の一人からは「人口減少は構造的課題。このまあいくと数年後には役員選出もままならなくなる。それでもお寺を預かるものとして、阿弥陀さんに申し訳ないことはしたくない」

阿弥陀さんに申し訳ないことはしたくない

◆丹波第2組では、3年前まで組の報恩講というものが動まってきた。これは報恩講が勤められない寺院が出てきたことを受け、組内11ヶ寺が毎年輪番制で会場を受け持ち、組内全体で報恩講の場を担保していくものであった。22年間続けて来られたがコロナ期に中止。コロナで何もかも変わってしまった。

◆若い人にお寺に来てもらうにはどうすればよいか。「花まつりや除夜の鐘の際には、法要はせずにできるだけ足を運びやすいものを用意している。おかげで多くの子どもや親世代が来てくれるようになった」

◆一方で、お取り越し（在家報恩講）の習慣がないため、新たにお勧めしてもなかなか勤めてもらえない。「やっぱり習慣に勝るものはない」

◆年間3〜4軒の墓じまいの申し出があったある寺院では、永代供養塔の設置を検討。「門徒は移動型やの寺は固定型では、門徒が離れていくのは必然」

雑感

この度の巡回懇談会では、普段なかなか聞けない各寺院の悩みや、不安、取り組み等リアルな話を初めて聞かせて頂きました。

各寺院がそれぞれ悩みをお持ちで、取り組みも様々だと感じました。しかしながら、特に際立ったものは、どの寺院も人口減少で苦労されているように感じました。それは将来的に心配されている寺院もあれば、現在リアルに、この先お寺を解散するかもしれないという瀬戸際に立っておられる切実な寺院も見受けられました。このようなことは全国的な問題だとは思いますが、正直なところ、これからの十年が本当に寺院環境も様変わりしていくだろうと懸念しております。

その上でお念仏の教えにいかに関心を持って頂き、仏法を次の世代に相続していくのかが、直近の課題だと改めて感じました。この度は貴重な機会を設けて頂きありがとうございました。

丹波第2組 組長 延福寺住職 松下暢樹

